

第 64 回 福井県保育研究大会 報 告 書

と き 令和 8 年 6 月 20 日（土）

ところ パレア若狭、生涯学習センターなびあす 他

主 催

福 井 県

社会福祉法人 福井県社会福祉協議会

若 狭 町 ・ 美 浜 町

目 次

大会日程	・・・・・・・・	1
大会参加者数	・・・・・・・・	2
分科会報告	・・・・・・・・	3
第1分科会	組織力・チーム力向上のためのマネジメント ～施設内の環境づくり、人材確保と育成・定着、 施設長(管理者)の資質・変革等～	
第2分科会	子育て支援・多機能化 ～地域と連携した子育て、 地域のニーズに応える施設づくり～	
第3分科会	子どもの育ちを保障する関係機関とのネットワーク ～保幼小、虐待対応、療育、地域等における連携～	
第4分科会	すべての子どもの育ちを支える保育の質の向上、家庭支援 ～保育のブラッシュアップ・充実した家庭支援、 食に関する支援を考える～	
第5分科会	公立保育所・公立認定こども園等の使命と地域社会での 役割	
全体会報告	・・・・・・・・	15
大会宣言	・・・・・・・・	19

第 64 回 福井県保育研究大会 日程

令和 8 年 6 月 20 日（土）

【午前の部：分科会】 9：30～12：00

分科会	研究テーマ	会 場
第1分科会	組織力・チーム力向上のためのマネジメント ～施設内の環境づくり、人材確保と育成・定着、 施設長(管理者)の資質・変革等～	若狭町歴史文化館講堂
第2分科会	子育て支援・多機能化 ～地域と連携した子育て、 地域のニーズに応える施設づくり～	リブラ若狭講堂
第3分科会	子どもの育ちを保障する関係機関とのネットワーク ～保幼小、虐待対応、療育、地域等における連携～	生涯学習センターなびあす コミュニティールーム
第4分科会	すべての子どもの育ちを支える 保育の質の向上、家庭支援 ～保育のブラッシュアップ・充実した家庭支援、 食に関する支援を考える～	保健福祉センターはあとぴあ はあとホール
第5分科会	公立保育所・公立認定こども園等の使命と 地域社会での役割	パレア若狭研修室 AB

【午後の部】 13：30～16：30 会場：パレア若狭、生涯学習センターなびあす

内 容	
(1) 全 体 会	○開会の言葉 福井県社会福祉協議会保育部会長 澤田 夏彦 ○保育の歌斉唱 ○児童憲章朗読 若狭町立わかば保育園 塚本 由佳 ○挨拶 福井県副知事 武部 衛 福井県社会福祉協議会副会長 山岸 博之 若狭町長 渡辺 英朗 美浜町長 戸嶋 秀樹 ○祝辞 福井県議会厚生常任委員会委員長 松崎 雄城 氏
(2) 研究発表	テーマ 「つながる つなげる 遊びのプロセス —自園(自分)の保育を考えよう—」 発表者 鯖江市公私立保育研究会
(3) 記念講演	テーマ 「子どもの権利を支える保育の共同体づくり —対話による往還的学びがひらく保育の世界—」 講 師 福井大学 教育・人文社会系部門 教員養成領域 教師教育講座 准教授 宮本 雄太 氏
(4) 大会宣言	宣言文朗読 若狭町立ののはな保育園 藤川 美紀
(5) 次年度開催地挨拶	越前市こども未来課長 須磨 紀美子 氏
(6) 閉会の言葉	若狭町子育て支援課長 原田 太輔

第 64 回 福井県保育研究大会 参加者数

	第 1 分科会	第 2 分科会	第 3 分科会	第 4 分科会	第 5 分科会	全体会のみ	その他 (幹事等)	計
福 井 市	7	14	21	23	3	5	—	73
敦 賀 市	9	5	4	7	2	0	—	27
小 浜 市	6	6	6	5	3	4	—	30
大 野 市	3	4	4	5	1	0	—	17
勝 山 市	1	4	9	4	0	0	—	18
鯖 江 市	6	6	11	7	4	3	8	45
あわら市	4	4	5	4	3	0	—	20
越 前 市	6	6	8	8	3	2	—	33
坂 井 市	7	5	7	24	1	0	—	44
永平寺町	0	3	1	3	0	0	—	7
池 田 町	0	0	0	0	0	0	—	0
南越前町	1	3	3	2	1	0	—	10
越 前 町	3	6	3	3	1	2	—	18
美 浜 町	0	0	0	0	2	0	2	4
高 浜 町	6	6	5	8	3	0	—	28
おおい町	2	2	0	3	0	0	—	7
若 狭 町	0	0	0	0	0	0	3	3
そ の 他 (学識助言者)	1	1	1	2	1	0	—	6
計	62	75	88	108	28	16	13	390

分科会



第1分科会

組織力・チーム力向上のためのマネジメント

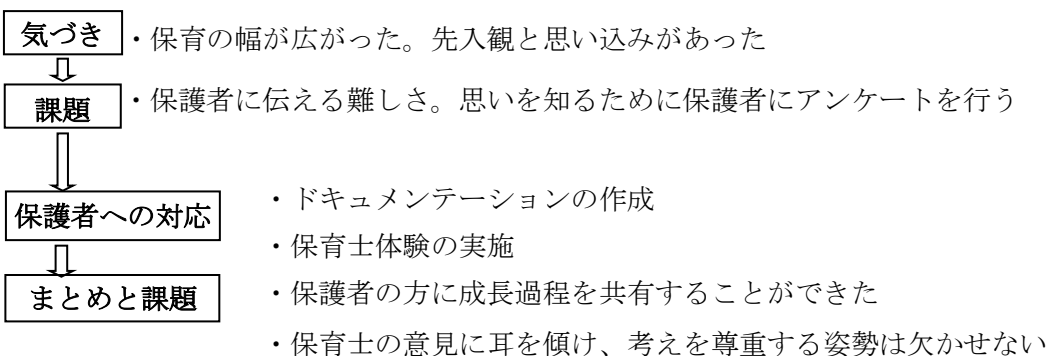
～施設内の環境づくり、人材確保と育成・定着、施設長(管理者)の資質・変革等～

司会者	遠敷保育園 名田庄こども園	園長 園長	田中 良恵 松井 智子
助言者	仁愛女子短期大学	学長	石川 昭義
意見発表者	金山保育園 あわら敬愛こども園	園長 主幹保育教諭	伊部 悦子 敷野 智里
幹事	わかば保育園	園長	北川 香緒里

1. 意見発表の概要

★保育士のチームワーク力向上をめざして

- ◎「まる・笑顔でまる・心もまる、手とてをつないでまんまるなかま」
- ◎「強く生きる力のある子ども」「育てる人同士の信頼関係と考え語り合うこと」
- ・コミュニケーションスキル...
- マネジメントや保育を進めたり運営したりするチームワークの能力の1つ
- みんなで語り合おう...以上児、未満児にわかれての会議（年齢別・方法・付箋の色分け）



★職員一人ひとりが心身ともに健康で生き生きと活躍できる職場環境づくり

◎働く職員の健康づくりを推進するための取り組み内容

- ・健診などの活用を促進しストレスチェックを継続
 - ・一人ひとりがやりがいをもって働けるよう、人生の経験に応じた多様な働き方の推進
 - ・業務改革の徹底や人員対策の見直し
 - ・職員の心身の健康保持の為に必要な休憩時間や場所の確保を行う
 - ・管理職を対象にメンタルヘルスケアに関する研修を実施
 - ・健康づくりの取り組みの経費を本部で負担
- など 11 項目

◎福利厚生

- ・リフレッシュ支援制度・奨学金返済支援・職員報酬金制度・就職金返済支援

制度の充実 職場の環境づくり 働きやすさ ⇨ 人材確保と定着

2. 討議の概要

◎風通しのよい職場づくり

- ・全職員で話し合う
- ・若手職員がどんなことでも相談しやすい先輩、上司になっていく⇒付箋を使用する、一人では発言しにくいのでチームやペアで話し合う
- ・正規職員、会計任用職員とが大事なことを伝えられているか⇒昼寝の時間を使っての情報交換など
- ・職員会の持ち方
- ・職員一人ひとり心のゆとりが大事⇒そのような園づくりを行う
- ・先入観をもつのではなく、話し合える環境づくり

◎働き方改革

- ・現場の話を聞く
- ・休憩時間の確保... ホワイトボードに名前をあげる・どのように時間を使っても良い
- ・雑相できる関係...雑談の中から若手も含め、話し合いがしやすくなった

3. 助言者のことば

<石川先生より>

◎組織力・チーム力が求められる理由

1. 質の向上 園は利用者から選ばれる時代
2. 保育士の安定的な確保
3. 「指針」「教育保育要領」の改定を控えている



◎保育の資質向上に向けた組織力

- ・自園の保育の理念・方針を理解する
- ・自園の特徴、強み弱みの理解と共有
- ・自己評価の実施（個々・組織）
- ・対話の重視（語り合い、学び合いの職場の環境づくり）
- ・他職種との協働による保育の質の向上



◎心理的安全性

- ・プレッシャーなく発言できる職場の会議
- ・子どももプレッシャーなく発言しやすい先生であること

◎保育者の資質向上が求められる脈路

- ・保育者は子ども一人ひとりの人格を尊重して、保育を行わなければならない
- ・小さな子どものいる家族の暮らし、ライフコースがこの20年間で劇的に変化してきた
少子化も進んでいる...家族のあり方、家族の時間の過ごし方、園と家族との繋がり（子育てについて相談ができる場）

◎こどもまんなかチャート

- ・子どもをまんなかにしてそのまわりに、保護者・保育者・養育者

★身体的な幸せ ★精神的な幸せ ★社会的な幸せ

◎子どもにとって、家庭や園での経験が大事

- ・地域との繋がりが希薄になる中で、園や家庭での経験が大きな意味をなしていく
そのために、組織力・チーム力が大事になってくる

第2分科会

子育て支援・多機能化 ～地域と連携した子育て、地域のニーズに応える施設づくり～

司会者	河野保育園	園長	野崎 知美
	陶の谷保育園	園長	高田 真光
助言者	福井市こども家庭センター分室	室長	安井 弘二
意見発表者	認定こども園花園	保育教諭	西口 佳芳里
	認定こども園 cocokara	主幹保育教諭	松崎 瑠利
幹事	明倫保育園	園長	清水 由美

1. 意見発表の概要

◎地域に選ばれ、愛される「推し」の園を目指して

当園では文化施設の充実、交通の利便性などを活かし、子ども達は様々な活動に積極的に取り組んでいる。その一方で、核家族化や地域社会との関係性の希薄さから、強い孤立感を感じる保護者が増えている。園が、地域と連携し子育ての拠点となるべく、取り組みを実施した。

＜園と保護者のつながりを築くために＞

- ・保護者に伝える活動の様子に保育士の視点を加えることで、保護者から家での様子について不安を相談されることが増えた。
- ・保護者の保育士体験により、子どもの成長を感じてもらうことができた。特に5歳児の保護者に誕生会に参加してもらうことで、ここまでの育児を労う機会となり、子どもにとっても自己肯定感が高まる機会となった。
- ・これまでの行事を見直しにより、未就園児の参加が増え、入園に向けての見学に繋がった。
- ・地域の行事に参加することで、園児やその保護者が地域社会と繋がるきっかけとなった。
- ・園の開放日を増やし、内1回はクラスに入ってもらうことで育児不安の解消に繋がった。

自園に欠けているものを見直し職員で共有することで、「地域で子どもを育てる拠点」という目指す像が見えてきた。インスタグラム等を活用し、園の知名度を向上させ魅力を発信することで、保護者の心の拠り所・地域に支持される園を目指していきたい。

◎家庭・地域・園でつむむ子供の笑顔 ～つながり合う未来に向けた保育園の役割～

町内公立保育園・認定こども園・私立認定こども園が互いに連携を取り、子ども一人ひとりを大切に見守り支えている。また、核家族化、ワンオペ育児など、孤立社会のストレスの中にいる子育て家庭を支えるため、各関係機関と連携を図り、専門的な多くの手で子ども達を支えている。

園では、ICT活用により、園生活への不安を取り除いたり、個人面談、保育参観、子育て相談を行ったりして子どもの様子を共有し、育ちを支える。子ども家庭センターでは、園見学ツアーなどを取り入れ、親子の学びの場を提供し、みんなで遊び関わり合う場となっている。

子どもたちは、地域の祭りへの参加や、地元産業とのつながりの中から「杜仲」に触れる体験、さつま芋苗植え、味噌作り等、実物に触れる中で、新たな発見、気づきを得ることができている。また、伝統行事に触れることは、子どもも保護者も地域の一員であるという仲間意識を持つことができ、自己肯定感の向上にもつながっている。

情報過多の時代の中で不安になりやすい子育て世代にとっては、園の開放日が子育ての実践モデルとなり、悩みを話したりする場にもなっている。子どもを取り巻く、家庭・地域・各関係機関とのネットワークをより深め、子どもたちのよりよい育ちに繋げていきたい。

2. 討議の概要

12 グループに分かれ、次の2つの柱をもとにグループ討議を行った。

- ①各園の地域との関わり方 ②そこから見えてくる課題・問題点

<各グループより>

①について

- ・老人施設と併設の園では、日頃より世代を超えた関りが日常となっている。それ以外にも近隣の老人施設や地域の老人クラブ等との交流を行っている園が多かった。
- ・地域に由緒ある祭り等がある園では、子どもたちが祭りなどに参加し、地域の方と一緒に伝統文化に触れることで、文化が次世代に引き継がれている。
- ・地域の特色や特産物を活かし、地域の方と一緒に花や野菜を育てたり収穫をしたりするなどを体験し、このことをきっかけに、地域の方が子どもたちを気にかけてくださるなど交流が広がることも多い。クッキングなどの食育に繋げる園もあった。
- ・絵本の読み聞かせやスクールサポーター(交通安全)、散歩時の見守りなど、日常的に子どもたちが地域から守られている雰囲気がある園があった。

②について

- ・コロナ以降、コロナで途絶えた交流の再開が難しい。
- ・地域差があり、立地的に地域との交流が難しかったり新たに地域の方と触れ合う機会を作るための人脈作りに悩まされたりしている。
- ・祖父母世代が働く世代であり、伝承遊びなどは知らない世代である。
- ・過疎の市町では、少子化と高齢化が進んでおり、地域との交流もなかなか取り組みにくい場合がある。
- ・特に地方では、早くから保育園等に預ける保護者が増え、園を開放しても、参加する子どもが増えていかない。

3. 助言者のことば

どの園でも、地域の社会資源を活用している。それぞれの園で様々な工夫をしていると思うが、例えば芋掘りのような農作物を軸にした活動を予定している場合、例年のとおり今年も実施できるのか、不作で芋掘りができないなどの事情がないかなど、日頃から地域の方と情報交換できることが重要である。このような地域とつながりを持てる人が園に1、2人いるとよい。日頃から先生方も地域との繋がりを持てるような工夫ができるとよい。

コロナ以降、様々な活動が減り、集団での活動に入りにくい方も増えていることも考えられる。保育参観には来るが、先生との個人懇談を避ける保護者もいると聞く。保護者が自然に園に寄りたくなるような工夫が必要ではないか。

例えば、登降園時の挨拶に加え一声かけることで、送迎している保護者があたたかみを感じることもあるであろうし、このような工夫はいつの時代にも共通して大事なことである。

また、園の行事等は、基本的に園主導で行う方が安全でスムーズにいくのかもしれないが、当事者参加型として保護者にも行事の一端を担ってもらうのもよい。当然協力的な保護者も非協力的な保護者もいるであろうが、できるだけ気持ちよく参加してもらう工夫の一つがやはり明るい挨拶だと思う。このような関係性の広がりが、地域の人材資源の掘り起こしにつながるかもしれない。人材資源をリストアップし蓄え、その人材にもまた当事者となってもらうことで、より地域と

繋がり、ニーズに応える園づくりができるのではないかな。人材やアプリなどを活用し、先生方の負担を減らし、先生方が元気に子どもを迎えられるよう願っている。



3分科会

子どもの育ちを保障する関係機関とのネットワーク ～保幼小、虐待対応、療育、地域等における連携～

司会者	篠座こども園 和田保育所	主幹保育教諭 所長	井尾 成美 松田 庸子
助言者	仁愛大学 栄養・子ども学部 子ども教育学科	講師	渡辺 直人
意見発表者	ふじこども園 ケイターこども園	主幹保育教諭 主幹保育教諭	山本 留美子 松本 陽子
幹事	せせらぎ保育園	副園長	杉浦 恵

1. 意見発表の概要

◎支援が必要な子に対する専門機関との連携について考える

先天性の病気がある子の支援について、家庭や各専門機関との連携など、保育園の取り組みについて発表された。

①鯖江市との連携

先天性の病気を持つ子どもの支援では、入園前に関係機関と連携し、子どもの状況や家族の思いを共有することで、適切な配慮を園生活に活かす重要性を学んだ。

②療育機関との連携

入園後は、子どもの発達に合わせた療育を進め、リハビリ内容を園でも活用するようにしたが、保護者の希望とずれが生じることもあった。医師や療育センターと連携し、発達を考慮して、園では一つ下の年齢のクラスで過ごす、周りの子どもから得られる刺激もあるので、活動に応じて同年代のクラスで過ごす時間を作るなどした。保護者の悩みや園での様子を踏まえ、療育センターからのアドバイスを一緒に聞くことで、共有できるものも多かった。

③職員間での情報共有

リハビリの様子を撮影し共有することで、言葉だけでは説明が難しいことも他の職員に伝わりやすくなり、園全体で子どもを支える体制を強化できた。

④まとめと課題

家庭と連携し信頼関係を築き、関係機関や保護者と協力して同じ方向で支援を進めた。今後も連携を強化し、子どもが安心して楽しく過ごせる環境を園全体で整えていく。

◎つながりで支える子どもの育ち～関係機関との連携～

配慮が必要な園児の就学に向けた取り組みについて、保護者や専門機関との連携を中心に入園から就学までを支えた。

①こども園での取り組み

入園時は環境の変化による不安が大きく、思い通りにならないとパニックになることが多かった児童だが、担当保育者の配置や、保育室の中に安心できる場所を確保する、絵カードでスケジュールを提示するなどの手立てを行い、安心して過ごせるようになっていった。

②専門機関との連携

巡回カウンセラーからの助言を保育に取り入れたり児童デイサービスセンターに近い支援環境を整えたりした。情報は、園全体で共有し見守ることを大切にした。

③就学に向けて

5歳児健康診査、就学支援委員会などの機会を通して、家庭、小学校教諭、専門機関との連携を大切にしながら、母の意向を尊重し就学した。

④まとめと課題

今後も関係機関とのつながりを大切に、発達に合わせた支援環境を整え、「子どもの味方」、「保護者の味方」であることを大切に、支援を継続していきたい。

2. 討議の概要

◎子どものよりよい育ちを保障するために園として何ができるか

- ・各市町、巡回訪問、カウンセラー、病院、小学校など、関係機関と連携しながら育ちを支えている。
- ・療育は保護者の同意があると進めやすいが、「子どもの姿を認めようとしない」、「家庭で困っていない」、「園と保護者の意識のずれがある」などの理由で同意が得られない場合がある。日常的に密なコミュニケーションを図り、信頼関係を築くことが重要である。保護者との信頼関係が崩れる恐れがある場合は専門機関の支援を借りて対応している。
- ・保護者への伝え方が難しいが、保護者の思いに寄り添いながらも大切なことは伝えていく。
- ・保護者対応について職員で共有し、同じ関わりができるようにしている。
- ・専門機関はそれぞれ特色があるので、保育者がその違いを理解しておくこと、保護者に説明しやすくなり子ども一人一人に合った療育に繋げやすくなる。
- ・子どもの様子は環境で変わるため、療育の現場を訪問して姿を共有している。しかし、保育園側が見学に行けていない現状もあり、見学に行きやすい環境づくりが課題である。
- ・就学に向けて5歳児健診を行っている市町もある。TASPを使用しているところもあるが、時間がかかり保育者の負担が増えることが現状である。

3. 助言者のことば

<仁愛大学 栄養・子ども学部 子ども教育学科 講師 渡辺 直人先生より>

○2つの園が連携の重要性について発表していた内容を振り返ると、連携（情報共有）を超えて協働であると言える。子どもの権利条約の「児童の最善の利益」に繋がる一番大切な場所は家庭であり、その家庭を支えるためにも関係機関とのネットワークを大切にしていける必要がある。

○社会的なネットワーク、すなわち健康な組織とは、連携・協働が機能している体制であり、次のようなことが言える。

- ・対外関係が良好ということは、組織においても健康である。
- ・対外関係が良好であればあるほど、子どもに還元される資源や、子どもが受ける支援は豊かになる。
- ・有益な資源は、家庭を通じて子どもに還元される。
- ・教育格差や文化資本の差を乗り越える鍵は、保護者との信頼関係と協働するチーム体制である。



第4分科会

すべての子どもの育ちを支える保育の質の向上、家庭支援 ～保育のブラッシュアップ・充実した家庭支援、食に関する支援を考える～

司会者	めいりんこども園 二葉保育園	園長 副園長	西川 愛 藤 道子
助言者	仁愛大学 公益社団法人 福井県栄養士会	名誉教授	西村 重稀 石黒 真理子
意見発表者	雄島こども園 上庄こども園	副園長 主幹保育教諭	北山 奈々 帰山 裕子
幹事	あおなみ保育園	副園長	牧野 佐也佳

1. 意見発表の概要

◎語り合いを通した保育の質の向上

①語り合いの価値と効果

- ・日常の中で子どもの姿や保育のねらいを仲間と語り合うことで、保育の質が向上する。語り合いは特別なものではなく日々の振り返りとして位置づけると効果が高い。
- ・職員同士が互いの良さを認め合うことでモチベーションが上がり、風通しの良い職場になる。保護者への発信（ドキュメンテーション等）にもつながる。

②具体的な実践例と成果

- ・5分参観：短時間で実施できるため取り組みやすい。事前に活動を掲示するなど工夫すると参加しやすく、当初は保育士のための参観が難しかったため子どもと一緒に参観する形に変化。結果として異年齢交流に発展し、参観時間が延びる例も出た。
- ・ポジティブフィードバック（ほっこりカードなど匿名での良いところ伝達）：恥ずかしさの軽減、身近な保育者の理解促進、モチベーション向上につながった。

③まとめ

日々の語り合いを継続的に実践することで、保育の本質を見直し、専門性とチーム力を高め、保育内容の質を向上させることが期待できる。時間や心理的ハードルを減らす工夫（短時間化、ルール設定、匿名フィードバック、事前周知等）を取り入れ、継続可能な仕組みづくりを進めることが重要である。

◎食を通して広がる学び～子ども、家庭、保育者の育ち合い～

①取り組みのねらい

食に関わる経験を通して、子どもの主体性を育み、家庭や地域とつながる保育実践を目指している。園内の栄養士・調理師の提案を起点に、園全体で食育を展開し、子どもの気づき・探求を深め、家庭支援や地域連携につなげている。

②主な取り組み

- ・情報発信：おすすめメニューや活動内容を掲示・ホームページで発信し、家庭へ伝える。
- ・家庭との双方向の連携：トピックスや掲示で家庭に発信し、保護者の経験やアイデアを共有・取り入れる仕組みをつくる。

③大豆を中心とした具体事例

- ・地域の味噌づくり見学から園での大豆栽培へ展開。大豆の成長・変化を観察し、収穫→きな粉づくり→豆腐屋見学→厚揚げの調理→味噌づくり（地域連携）へと繋げた。
- ・掲示物（大豆ポスター）を「学びの道しるべ」として用い、五感で変化を体験させた。子どもたちの疑問やつぶやきが探求のきっかけとなり、生活発表会の表現にも反映された。

④まとめ

食育は子どもの「生きる力」を育む有効な入口であり、育てる・気づく・作る・表現する・待つという一連の経験を通して主体的な学びが深まる。家庭や地域との協働が、子どもの育ちを支える力を高め、保育者の学びと保育の質の向上にもつながる。

2. 討議の概要

『語り合いを通した保育の質の向上』について

- ・職員間で互いにフォローに入り、話す時間を確保したり、会議のテーマを設定することで、話し合う内容を前もって考えたり、少人数で話し合う場をつくり、思いを伝えやすくしたりと、時間・内容・場を考えていく必要がある。

『食を通して広がる学び～子ども、家庭、保育者の育ち合い～』について

- ・保育士がねらいをもって保育をしても、子どもたちの思いと重ならないことで、参加しないで終わってしまう難しさがある。特に行事に向かう時には、行事への意識が強くなりすぎたり、年齢によっても変わったりしてくる。保育者の願いが強すぎると、発意や発見も少なくなってしまうため、子どもたちと考えながら環境を整えていくことが重要になる。

3. 助言者のことば

<公益社団法人福井県栄養士会 石黒真理子先生より>

- ・子どもたちの食育は中学校頃までは積極的に学校などで取り組むことが多いが、その後は意識が薄れていく傾向にある。そのため、食について関心がない人も増えてきており、その大人が子どもを育てることになるため、社会全体の食育に対する意識が薄れてきている。そのため、今後、保育園から保護者への食事に対する情報配信はよりわかりやすく家庭でより取り組みやすい内容を伝えていくことが課題になる。

<仁愛大学名誉教授 西村重稀先生より>

- ・子どもの保育だけでなく、保護者支援も必要になったことで、両者への支援の質をあげていかなければならない。そのためには、しっかりと発達年齢を押さえて理解した上で、子どもの経験や興味、関心を踏まえ、様々な遊びを展開していく知識・技術を身につけていくことと、保育の自己評価を行い改善することが資質の向上へとつながる。



第5分科会

公立保育所・公立認定こども園等の使命と地域社会での役割

司会者	つるが保育園 雄島こども園	園長 園長	小川 加奈 前田 やよい
助言者	仁愛女子短期大学 幼児教育学科	准教授	川崎 恵理
意見発表者	家久保育園 みずうみ保育園	主任 副園長	森川 愛 武長 英理子
幹事	とばっ子保育園	園長	天渡 美紀

1. 意見発表の概要

- ◎子ども一人一人の人権を大切にする保育を考える
- 保護者との語り合いの見直し
 - 個人懇談や保育参加後の話し合いの実施
 - 行事や個人懇談、保育参加後のアンケートの実施
 - 相談しやすい窓口づくり
 } 育児の不安解消、園への安心感
信頼関係の構築
- 保育者自身の振り返り、環境や関わりの見直し
 - 見合いっこ保育を通したお互いの保育の客観視
 - チェックリストを用いた保育者自身の保育の振り返り
 - ガイドラインを用いた保育者自身の保育の振り返り
 } 子どもの遊びの保証
気持ちの安定
- 園での取り組みを保護者へフィードバックする
 - 保護者の変化→気持ちが安定し園や保育者への信頼関係が深まった
 - 「安心して子育てができる場所」としての認識が深まった
 - 保育者の変化→互いの保育を見合うことで「見とる力」の向上
 - 子ども一人一人の思いを尊重する環境構成の実現
- 課題…「良い循環」を園の文化として定着させる
 - 地域全体としての子育てのネットワークの基盤作り

- ◎美浜町らしさを生かして
- 地域とのつながり
 - ・地域との継続したつながり
 - 体験を通して感じる地域の人へのあたたかさ（学びの共感⇄深い学び⇄不思議や発見）
 - ・行政と共に取り組む新しいつながり
 - 地元の高校へ保育の魅力発信→映像での発信
 - ボランティアの体験を通して→子どものおもしろさを知り、進路の選択肢が広がる
- 語り合いの文化が生む保育の共有
 - ・子どもを真ん中においた保育の質の向上→公開保育、園内保育、支援研修の継続
 - ・保育の可視化と発信に向けて→全職員での語り合いと共有

↓

町内3つの園が同じ方向を向いて保育することにつながる

- 課題…行政との連携を強化し、保育、教育方針の一本化、保育内容の町内外への発信

2. 討議の概要

◎地域に根ざす公立保育園（所）の特性を生かした使命としての人材育成

○子ども数の減少、核家族化が進む中での地域のつながりについて

- ・ 少子化、核家族化から地域の方の協力が必要になる。気軽に地域の方に保育園（所）に来てもらうことが課題となる

○保育士不足が深刻化する中での若手保育士の確保と育成について

- ・ 保育ニーズの多様化に応じるための保育士の確保の必要性
- ・ 中堅保育士不足の現状、若手保育士が見て学ぶことがしにくい

○働き方改革が進む中での保育の資質向上と連携

- ・ 見合いっこ保育をすることで他の保育士の目線で担任が気づかない子どもの姿が見えてくる。フィードバックすることで保育の質の向上につながる
- ・ ノンコンタクトタイムを設け休憩要員の確保、職員のシステムの導入
- ・ 看護師が常駐することで子どもの怪我や的確な対応、保育士も相談できる態勢

3. 助言者のことば

<川崎先生より>

- ・ 保育所の役割とは、保護者と保護者をつなぐ場であり、教えるだけでなく子育ての伴走者である。
- ・ 園での取り組みをフィードバックする。→ICTの活用でその日のうちに配信。
保育の見える化が保護者の安心感につながる。

保育所保育指針が示す「保育所が行うこと」

○子どもの心身の穏やかな成長、発信を保障する保育

○養護と教育を一体的に行う保育内容の計画、実施

○保護者への子育て支援（相談、情報提供など）

○地域の子育て家庭への支援（園庭開放、講座等）

○家庭、地域の社会資源との連携による子育て支援体制づくり

→これらの取り組みを発信することが重要な役割

- ・ 地域とのつながりについて…交流と考えるから難しい。発想の転換が必要。地域の人々の活動の場に園を開放する、畑を手伝ってもらうなど地域の人々の姿が子ども達から見えるということが大切。
- ・ 保育士不足の深刻化、若手保育士の確保と育成について…
魅力を発信し続けることが大切。
若手保育士の不安については、複数担任だと先輩保育士がいることで安心できる。中堅保育士がいない現状は、若手保育士の孤立につながる。
- ・ 働き方改革について…どの職員も満足するシフトにすることが必要。早番、遅番専用の職員確保。
- ・ 保護者懇談会について…うまくいかないのはなぜか。保育士は話題、きっかけを投げかける役割。そこから派生する話の場になれば良い。



全体会報告



第 64 回福井県保育研究大会 全体会

開会挨拶



福井県社会福祉協議会
保育部会長 澤田 夏彦

児童憲章朗読



わかば保育園（若狭町）
保育士 塚本 由佳

主催者挨拶



福井県
副知事 武部 衛



福井県社会福祉協議会
副会長 山岸 博之



若狭町
町長 渡辺 英朗



美浜町
町長 戸嶋 秀樹

祝辞



福井県議会
厚生常任委員会委員長 松崎 雄城 氏



研究発表



テーマ：

「つながる つなげる 遊びのプロセス -自園(自分)の保育を考えよう-

発表者：鯖江市公私立保育研究会



記念講演



テーマ：「子どもの権利を支える保育の共同体づくり

ー対話による往還的学びがひらく保育の世界ー」

講 師：福井大学 教育・人文社会系部門 教員養成領域 教師教育講座

准教授 宮本 雄太 氏

大会宣言



ののはな保育園（若狭町）

保育士 藤川 美紀

次年度開催地挨拶



越前市こども未来課

課長 須磨 紀美子 氏

閉会

若狭町子育て支援課
課長 原田 太輔



大会宣言

本日、第64回福井県保育研究大会が『すべての子どもの権利と育ちを保障していく社会の実現』をめざして」をテーマに、風光明媚な三方五湖がまたがる、ここ若狭町と美浜町で開催されました。

さて、昨今、我が国においては、少子高齢化ならびに人口減少が急速に進行し、その指標の一つである「合計特殊出生率」は毎年過去最低を更新し続けています。本県においては、全国上位にあるものの、出生数は毎年減少しています。

現在、国や県においては、保育の質の確保や充実、すべての子どもの育ちと子育て家庭の支援など、こどもまんなか社会の実現に向けた様々な保育政策が展開されています。

その一方で、子ども人口の減少で、定員充足率が低下し、安定的な運営に支障をきたす事業所の増加や、統廃合等の可能性があることも念頭に、将来を見据えた教育・保育基盤の確保への対応も検討されています。

こうした状況を踏まえ、子どもや子育て家庭に最も身近な専門機関である保育事業所においては、すべての子どもの育ちの保障と、地域で安心して子育てができる環境づくりや、人材確保をはじめ、事業運営を持続可能にする未来像を私たち自身で描いていくことが求められています。

私たち保育者は、時代の流れや現実を柔軟に受け止めながら、積上げてきた実践を礎に、一人ひとりが自己研鑽に努め、専門職としての誇りと責任を携えて、社会的使命を果たしていくことを、ここに宣言いたします。

一 私たちは、子どもの最善の利益の保障はもとより、家庭や地域と連携し、こども園や保育所等の利用の如何を問わず、保護者に対する子育て支援に努めます。

一 私たちは、専門職として常に教育・保育の質の向上を目指すとともに、その取り組みを広く保護者や地域に伝えるよう努めます。

一 私たちは、教育・保育を通して子育ての楽しさ・食べる楽しさ・子どもの成長の喜びなどを共有しながら、親も子も育つ環境づくりに努めます。

一 私たちは、心身ともに健やかな成長を支える上で必要な教育・保育について、子どものみならず私たち自身も育ち合う仲間として、職場の内外を問わず積極的に議論し、提案します。

令和8年6月20日

第64回福井県保育研究大会